

有島武郎研究

—キリスト論を中心に—

宮野光男

有島武郎とキリスト教との関係について、これまでに通時的に考察を進め、その時々におけるキリスト教の有島における位置と意味について、またそれが有島の将来にいかなる意味をもったものであるかを予見してきたのであるが、今度は、明治四十三年札幌独立教会を退会し、いわゆる信仰離反に踏みきり、「一層自己の根底に立ち帰らん」との決意をもって始めた新しい生活において、キリスト教がいかなる意味をもっていたかを、有島のキリスト論を中心に考えてみたいと思う。

有島が作家としての生活を始めてから著したものは、キリスト教に関わりのあるものが多くあることは周知のことである。しかも、その時期の有島にとってはキリスト教の持つている意味は一種の残滓的なものであり、むしろ意識的には否定的にとりあつかわれているとの意見が大方のようである。しかし、有島の著したものに描かれているキリストは、かならずしも否定的な様相をおびているものだけではない。むしろ、積極的にその存在が認められているような気配さえ察知できるのである。そこでこの肯定的に描かれ

ているキリストを手がかりにして、退会後の有島とキリスト教の関係を考察してみたいと思うのである。このことは、先に公にした小論「有島武郎研究」—フレンド精神病院における看護夫生活の意義の考察—、および「有島武郎と未光績」において指摘した有島のキリスト論の特色についての予想を実証することにもなるうかと思われのである。

二

有島がキリストについて、神学的にその本質を論じている、いわゆるキリスト論があるわけではないが、一九〇三年以来公にした評論の中には、キリスト教に関して触れているものが比較的多くある。今それらの評論の中からキリスト論—キリストに関する叙述—として比較的まとまったものを抜き出してみると、大体以下に記す三種類に分類することができる。

第一のものは、未定稿「惜しみなく愛は奪ふ」(一九一七・五)の中で、愛の本質を「与へる本能」ではなく「奪ふ本能」であるとし、その愛を生きた者としてキリストを描いているのがそれである。

基督は与へる事を苦痛とするやうな愛の貧者では断じてない。基

督は私の耳に囁いて云ふ、「基督の愛は世の凡での高きもの、清きもの、美しきものを撰取し尽した。眼を開いて基督の所有の如何に豊富であるかを見るがいい。基督が与へ、施したと見える凡てのものは、実は凡て基督自身に与へ、施してゐたのだ。基督は何も失はない。而して凡てのものを得た。

このキリスト論は、『内部生活の現象』(一九二〇・一)を経て、同年三月完稿の『惜みなく愛は奪ふ』にまで継承されている本能的な生活者キリストを内容としたものである。

つぎに、有島が自己確立の二つの理想として、ローファーという概念を設定し、その一典型をワルト・ホイットマンに見出したことは、すでに周知のことであるが、有島は、キリストをホイットマン以上にローファーであったというのである。

ここに *lofter* と私の称する人があります。彼はいつまでもたった一人で歩かうとしてゐる人です。自分が絶対の自由の中に住みたいが故に、他人にも絶対の自由を許さないではゐられない人です。「中略」私の眼から見ると、基督教会の創始者と称へられてゐる基督その人は絶大な *lofter* の一人であつたかと思ふのです。〔ホイットマンに就いて〕一九二〇・一〇〕

「彼れはホイットマン以上にローファーである。」〔「独り行く者」一九二二・七〕というときに、有島は、キリストの中に主義・制度・権力と争う自由人を、「固定して行かうとする主義の人」に對して「流動」を目論む生命を見い出そうとしているのである。た

とえば、ゴルキーやクロポトキンも、有島にとつてはローファーであつた。

第三のキリスト論は倉田百三が「静思」において、二千年前のユダヤで当時の権力階級であつた祭司と結託して民衆を愚弄した商人に對するキリストの態度が「彼らの愛に訴へ、彼等をして自発的にその問題を正しく解決せしめんとする教化」というものであると述べているのに對して、有島は「「静思」を読んで倉田氏に」(一九二二・十一・十二)の中で、キリストを直接行動を敢えてするところの「即実主義者」であるというものである。

基督は決して時代を超越した瞑想的理想主義者ではなくして、同時にきびしく現実に即し、その思想を現実の問題に對して、現実の方法によつて闘はした人であつたことを思はせませう。「中略」若し基督が単に空靈な理想の提唱者であつたなら、いかに道理の分らぬ祭司、パリサイ人と雖も、磔刑を以て彼の命を絶つやうなことはしなかつたでせう。十字架による彼の死は、彼がどれ程即実主義者であつたかということを語るものでなければなりません。

このキリスト論は、一九二二年十月、国民婦人会講演会における『道徳と道理』と題する講演の中でも語られており、当時の有島のキリスト論の一面を伝えてゐるように思われる。

先にも述べたように、ここにとりあげた評論および講演は、キリスト論が中心課題ではなく、あくまでも、それぞれの主題を側面的に説明するための具体的な例としてなされたキリスト論であるの

で、表現も三種三様であるが、それだけに、よけいに有島のキリスト論の特色をよく表わしているということができよう。

ここに紹介したキリスト論において有島は、キリストの本質として、本能的な生活者をつまみ自らのうちに行動の契機をもち、外界に対して主体的に関わりをもつことのできる自由人を提示しているのである。これはもはや、正統的な聖書理解にもとづく神の独り子なるキリストではなく、人間キリスト論であるということができよう。有島はここでキリスト教会においてなされている正統的な聖書解釈の制約を越えた人間キリストを有島の生の実現のための理想像として描いているのである。その意味において有島のキリスト論の本流は「『人間イエス』への憧憬」「『有島武郎と未光續』」であったということができよう。有島は、ホイットマンの神を「ホキットマン自身の延長としてのみ存在の可能が許された」「『ホキットマンに就いて』」ものだとしているが、それと同じことが、つまり「有島のキリストは、彼の延長としてのみ、その存在の可能が許されている」ものであったということができよう。

三

有島が、正統的な信仰の対象としてのキリストよりも、「人間イエス」に対してより深い関心を持つていたであろうということが、ルナン〔註一〕の『イエス伝』を重んじていたことからも理解することができる。

一九〇三年十一月二十八日、米國留学中の有島は、両親に「学科を終へたる後、小生は独り費府に出で書店に至りて、ルナンの基督傳（此休暇中に読終り得可き格好の小冊子）を求め」たと書き送つ

ている。その時、有島がこの書物をどのように読んだかは記録がないが、一九一六年十月十五日の日記には、北海道旅行に携行したことが記されているし、翌年二月十六日および二十六日の日記にも「熱心に」読んでいると記されているところから考えても、この書物に有島にとつて無関心ではいらなかったものの一つであったことは想像にかたくないところである。日本に、ルナンの『イエス伝』が紹介されたのは、一九〇八年（明治四十一年）七月、綱島栄一郎〔梁川〕訳、安部能成補訳で三星社より出版されたものが最初であるが、その後一九二一年一月、加藤一夫の訳によつて世に出たイエス伝〔訳名「耶穌の生涯」〕が、有島、内田魯庵鑑選の杜翁紀念文庫の第三集に収められていることから、有島のこの書に対する関心の度合を知ることができよう。

ルナンは耶穌伝を著してイエスキリストを人間のなものにしてつた。〔『イブセン研究』一九一九・十二〕

有島のこの感想からは、正統的の神学において規定しているキリストの神性を否定し、史的存在としての人間イエスにしてしまつたことに對する非難の響きを聞きとることはできない。むしろ、有島によつて、肯定的に受けとめられていることは、彼のキリスト論からも明らかなるところである。

* * *

有島が自らの作品に形象化したキリスト像は、ルナンの聖書解釈の基本的態度である史的事実としてのイエスと本質的に同じものであるということができる。

「『聖餐』に就いて」(一九二二)の中で、有島は「『聖餐』に於ては、私は聖書の解釈に或る新しい考へ方を試みようとした。それは誰にも意外であったキリストの捕縛と死刑とが一人の女子に予めキリスト自身に由つて告げ知らされてゐたに違ひないという事実である。キリストは周囲の凡ての人から受けてゐた誤解の中にあつて只一人の理解者を求め出し得たやうに思はれる。」「それはマгдаラのマリヤという」「一人の女である。彼女は強い愛の持主であつた。」「このマリヤのみがキリストの心を靡げながら感じてゐて、キリストの死後、弟子達が絶望の余り一人残らずキリストを離れ去つた時にも、一人もとの信仰に踏み止まつてキリストの信仰をこの地上に繋ぎ止めたと思はれるのだ。」と述べている。有島のこの「『聖餐』のマリヤについての考へ方は、一九二〇年三月十一日付竹崎八十雄牧師あて書簡にも同様の主旨のことがかなり断定的に述べられており、有島の一種の信仰でもあつたことを知ることができるとくに、その書簡の中で、「基督の死後弟子達の中に起つた不安と絶望とがマリヤの予めの覚悟と熱意によつて救はれ、そこから基督の信仰が再生したと見る私のこの劇「『聖餐』」のこと。筆者註」に於ける *essence* なる考へ方は、あの劇に於て相当に生きて描かれてゐないかと私は思ふのです。」という一節は、つぎの引用からもわかるようにルナンの語るマリヤの果した役割に対する考へ方と共通のものである。

歴史家にとっては、耶蘇の生涯は彼の断末魔をもつて終りとす。しかし、尚教週間の間恰も彼がなほ生きていて彼等を慰めてい

たと云ふのが、彼が彼の弟子達及び二三の篤信なる婦人の心情に残せし印象であつた。彼の屍は取り去られたのであるか、それとも常に軽信し易き熱情が、後にそれによつて復活の信仰が定められたところの一群の物語を創作したのであるか。相反せる記録がないからとて、これを確証する事は出来ない。しかし、マгдаラのマリヤの強烈なる想像が此の事に於いて重要な役割を演じた事だけは云つておこつた。愛の神的力よ！人間の熱情が靈動された聖なる瞬間こそ、世界に復活の神を与えたのである。(加藤一夫訳「耶蘇の生涯」・傍点筆者)

竹崎牧師の「聖餐」評は、竹崎あての有島書簡によれば否定的なものであつたらしい。「あなた「竹崎」が私の『聖餐』は抹殺するがよいとの御考へは一面よく理解できますが……」という言葉からその間の事情は推測できるが、当時のキリスト教界の有島評は一人竹崎のみならず概ね否定的であつた。一九二一年七月二十五日付灰谷やす子あて書簡によると、池田某なる者は著作集「三部曲」を庭に抛り投げ、女子基督教青年会の酒井道子は、有島がどれほど青年男女を墮落させているかわからないから抗議を申し込むと言つてゐることなどが述べられているが、これらの有島評は彼の死後内村鑑三が下した「背教文士」宣言と轍を一にするものであるといふことができよう。それは、キリストの十字架と復活とを認めぬ異端への一換言すれば「神人キリストの生涯における信仰の源泉たる超自然的要素をのぞき、またそのきびしい道德面をもはぶいて、キリストをガリレアの説教家という最も魅力ある人物として、その心理描写を文芸作品として描いた」(小林珍雄「名著鑑賞」J・E・ルナ

ン「イエス伝」』』ことに對する正統信仰の側からの挑戦だったのである。

四

以上の考察から有島のキリスト論が自由主義的傾向を持った「人間イエス」への憧憬を内容としたものであることを知ることができたが、このことがいわゆる退会を契機としたキリスト教離反を境として、正統的なキリスト論から異端的なものへと百八十度の転換をとげた結果であるかという点、それはかなり否定的である。信仰日記とも称される退会以前の日記の中に、すでにこのキリスト論の傾向を見ることができるのである。

有島は偉人を定義して、

偉人とは高く広く深く見得る人なり。物に就て最も多くの意義を
発見しうる人なり。〔一九〇一・十一・二十、日記〕

という。そして「基督は如何なる人なりしぞや。彼は偉人中の偉人なり。人類中の神なり。」として、キリストこそ偉人の典型だといふのである。「人類中の神」と言いたしているところには、キリスト者として生きようとしていた当時の有島の自覚がうかがわれるが、この論の中心は偉人としてのキリストにあることは間違いないまい。勿論これだけで有島のキリスト論が「だちに神性否定の「人間イエス」を内容とするものであったとするのは早計であろうが、有島の信仰、就中キリスト論は多分にその人間性への傾斜を可能にす

有島武郎研究

るものであったということはできよう。先に公にした小論〔註二〕において指摘したように、有島の信仰が自然神学的な汎神論の傾向を帯びていたことは、逆に人間イエスを可能にする要因だからである。なぜならば、汎神論的神認識は、聖書におけるキリストによって啓示せられる神とは元来無関係の神をその対象とするものだからである。換言すれば、そこに例えキリストの名前が持ち出されて来たとしても、それは極端に神秘的な様相をおびたキリストから、各自の精神状況を映し出す分身としてのキリストまで、自由に想定されうる存在なのである。有島の場合、それは一方においては罪の告発者キリストであり、他方彼との等質性においてとらえることのできる愛の実践者でもあったわけである。さらに、信仰離反以前のキリスト論が人間イエスを本質としたものであったと考えることのできる傍証として、マゲダラのマリヤ〔註二〕をあげることができる。たとえば、新約聖書「マルコによる福音書」第十四章に出てくる一人の女について、

彼女はエルサレムに近きベタニヤに住み、よくエルサレムに起る事情を詳知することを得たりき。而して彼女は Poetic Woman なりしが故に彼女の鋭敏なる感情と、基督を敬慕する Affection とはよく基督が自ら知り給ひし如く、基督の死を予察せしにあらざるか。〔一九〇一・十一・二十四、日記〕

という。この女については、聖書のこの箇所では、「ひとりの女」と記されているだけであって明確さを欠いている。「ルカによ

る福音書」もこの女についてはこのような莫然とした描き方をして
いるのに対して、「ヨハネによる福音書」では、マルタの妹である
マリヤとして描かれている。さらに聖書伝説によると、このマリヤ
が実はマグダラのマリヤであるということになっているのである。有
島はこれらのマリヤ像を綜合し、さらに「ヨハネによる福音書」に
出てくる「姦淫の女」〔註四〕をも加えて「聖餐」の登場人物マグ
ダラのマリヤを形象化しているのであるが、キリストが復活をし
たのではなく、マリヤの記憶の中に甦ったのだとして、史的イエ
スへの可能性を、キリストの死を予察するマグダラのマリヤに托
したルナン及び有島の聖書解釈の中心が、すでに、この時点におい
て『聖餐』のマグダラのマリヤの原型である「ひとりの女」の中
に示されているということは、有島の聖書解釈のキリスト論の中
一つの傾向が暗示されているということにもなる。聖書解釈にお
けるこの自由な態度が「人間イエス」の存在の可能性を支えるも
のであるということも、あながち過言ではないように思われるので
ある。

キリスト教を、その伝統と形式とにおいて肯定的に受けとめよう
と努力していた時と、意識的に反抗しようとしていた時とは、自
ら表現も異ったものになるのは当然のことであるが、その本質キ
リスト論において質的変化をとげていかなかったことを自覚したから
こそ、教会退会以後においても、

私は基督教会からは離れましたが基督を離れたとは思ひません。

いくら離れようとしたってその圏外に出るには基督は大き過ぎる

事を感じてゐます。あなたの基督に対する信仰からいふと私は基
督を離れ切ったものといふ事になるかも知れませんが、私はそれ
は少し無理ではないかと思ふのです。〔一九二〇・三・十一、竹
崎八十雄あて書簡〕

ということができたにちがいないと思われるのである。

有島におけるルナンの位置。それは有島のキリスト論がかならず
しも退会を契機として生じた新傾向ではなく、その本質において入
信当時からすでに有島の内部に潜んでいたものであるとするなら
ば、ホイットマンが、エマソンについて、「私はエマソンによって
詩人になったのではない。私が其の時に詩人となったのだ。私の裏
に煮えてゐたものが、エマソンによって沸騰するに至ったのだ。」
〔「ホイットマンに就いて」〕と言っているのと同様に、いわば触
媒的役割を果したものと考えることができるものであろう。

五

有島のキリスト論における「人間イエス」への憧憬が根源的には
入信以来変らず持ち続けられていたものだとするならば、それは、
教会退会、信仰離反という事実を内面的に支えていたものだという
こともできるはずである。以下、有島の教会批判を手がかりに、
教会退会、信仰離反という行為が持っていた本質的な意味を考察す
ることによってその間の事情を明らかにしたいと思う。

〔帰途〕芝教会の説教を聞く。其処に偽善の祈祷あり、虚偽の讚

美歌あり。自ら聖別せられたるを以て誇となし、不信者を禽獸視する教徒。会堂の建築と聴衆の多からん事に注意して、靈魂の建築と信仰の上に多きを置かざる教師。此如き処より世に何のよきもの出でんや。「中略」世に最も心底より湧きし同情の缺乏せる所は教会なるべし。〔一九〇三・一・十一、日記〕

内村鑑三の指導のもとに成立した札幌独立教会でその信仰を養われた有島にとっては、伝統的な制度教会はつねに批判の対象であったことは言うまでもないことである。が、この時点における批判、教会の持っている偽善性と「同情の缺乏」は、その伝統的な教会観の中でなされたことであり、依然として回復の可能性を与えられたものであった。たとえばその二週間後の一月二十五日に、本郷の教会で、宮崎湖処子の「同情」と題する説教を聞いた時には、「一種敵愾敬虔の気は我其中に拾ひ得たるを信ず。祝福すべきかな。人に美観と誇張とを供せずして、卒直と敬虔とを供し得る人。」と肯定的に受けとめることもできたし、あるいはまた、札幌独立教会に対して、「日本の全基督教徒が雲烟過眼視する間に、彼女(札幌独立教会)は其生を保ち、後年一旦日本の基督教会が断然独立の熱望に動かさるる時、此処は其運動の中心たらん。主よ願くは彼女の上に祝福永久にあり給へ。」「一九〇三・二・二十、日記」と、期待をかけることもできたのである。

ところが帰国後の有島にとっては、現存する教会の制度なるものは、既に「我等が温情を暖むるに足る所ならざる」ものであり、教会については、

有島武郎研究

少くとも現存の教会は、如何に改良進歩するとも、遂に今後に生るる Generation の要求を満足せしむる事は不可能事なるべし。

〔一九〇八・一・二十二、日記〕

と言ひ、その存在の意義を認めることのできないものとなつてしまつていたのである。

札幌独立教会がその創設の時に、制度教会の持っている様々の弊を避け、「イエスを信する者等の契約」を守る者たちの信仰団体であることを確認したにもかかわらず、明治初期の教派間の勢力争いの犠牲となるに及んでさらに徹底した教会否定、いわゆる無教会へと発展していったことは周知のことである。有島の「札幌独立教会」〔一九〇一〕および「札幌独立教会沿革」〔一九〇八〕には教派間の勢力争いが禍いして、ともすれば教会の運営に支障をきたしていたことが記されているが、有島が、明治四十年十二月に旧札幌農学校〔東北帝国大学農科大学〕に英語の講師として赴任した時に、これよりやや遅れて来札し独立教会の牧師となつた竹崎八十雄の赴任の際の条件〔註五〕をみると独立教会の基本的な精神はほぼ守られていたと思われるのであつて、有島が札幌独立教会に対して決定的な否定を唱える理由はなかつたはずである。それにもかかわらず、有島の教会に対する批判は、さらに苛酷の度を増し加えてくるのである。

独立教会！汝は、日本に於ける数百の教会の中にあつて、「思想及び金銭上の独立不羈、凡ての宗派を合して一団とする〔英文略〕」といふ汝の熱烈に擁護し来れる主義を以つて赫赫と立つてゐる。余は汝が各種の艱難、試験に堪へ来られるその忍耐を賞嘆せざるを

得ない。然し、余に取りては、汝の生命も終りを告げた如く見える。余の考へでは、今日まで使はれて来た意味に於ける教会は、最早必要ではないのである。将来の教会は更に広く、換言すれば、その中に凡ての宗教を含むものでなければならぬ。凡ての宗教をしてそれらの礼拝及び説教の場所として一堂を持たしめ、その壇より、それらの宗教中最もよしと思はるるものを叫ばしめよ。この理性の時代に於て、宗教とても、世間一般の批評に超越するか、又はその境外にあることは出来ない。人をして、彼等の宗教として最も適するものを、多くの中より選ばしめよ。對抗を避け、そしてその信者のみ傲然として何の益があらうぞ。凡ての宗教を公然と相競はしめよ。時代の要求を満す真の宗教は、斯くする事によつて生れ出るであらう。余の心からの願ひは独立教会がその先驅をなすことである。〔一九〇八・一・二十八、日記〕

有島の独立教会にかけている期待は、もはやキリスト教会の範圍で考へることのできないものであるだけでなく、独立教会のもつている独自の埒外の要求がなされているということができよう。もはや、これは教会の内側に向つてなされたキリスト教会改革論ではなく、新しい生の共同体の出現の待望論である。

有島の教会批判が、米國留學を境にして、なぜ、このように大きな変化をとげたのであろうか。児玉晃一は、『有島武郎覚え書―「迷路」周辺―』において、ホイットマンは形式を嫌い制度というインスティテューションを嫌つたが故に信仰の目的自体になつてしまつた教会を否定したのであり、そのホイットマンの生き方および

教会觀に共鳴した有島が自らもまた「形式嫌惡の情」から教会批判を行つたのだとしてこの間の事情を説明している。ホイットマンの信仰が、いわゆる正統的なキリスト教会の教義から逸脱したものであつたということは周知のことであり、その意味ではこの意見は正鵠を得たものであるといえようが、有島のホイットマン觀からすれば、むしろ、教会批判という側面ではなく、その結果としての回復さるべき人間としての自己認識と、回復された人間の典型としてのローファー像を学んだのだということができるのでないだらうか。そして、直接的な教会批判は、むしろ、ロバート・G・インガソル〔註六〕に多くを学んだのではないかと思われるのである。『「リビングストーン伝」第四版の序』に、有島が米國留學中に得た収穫が述べられているが、その中でインガソルについてつぎのように言っている。

インガソルの浅薄ながら熱烈な、人情的な言論を私は屢々涙を以て読むやうになつた。健康な親愛な家庭の團欒する唄妒裏は聖壇だ。その火は神火だ。そこに最大の幸福を見出す他に天国はない。地獄といふ言葉が増さつて人生を暗くするものはない。その責は基督教にある。かう彼が叫ぶ時に私の心は強く共鳴した。

ホイットマンと同時代の人であり、ホイットマンの思想に大きな影響を与えた存在として知られているインガソルであるから、有島と彼との出会いは多分ホイットマンを通してであらうと推測されるが、現在その手がかりはない。ただ思想的には同系列にあるハクスリーの著作を同じころに読んでいたことが日記に記されている〔一

九〇五・一・十一」ことなどから考えあわせてみて、当時の有島の傾向が概ねインガソル的であったということはできよう。

信仰離反後の有島が、キリスト教およびキリスト教信者のもっていた形式主義と偽善性について論駁する場合、しばしばこのインガソルの言説をひきあいに出していることからわかるように、有島はインガソルを「正義派を以て任ずる基督教徒の頭上に大きな針を打ち込んだ」(「『リビングストン伝』第四版序』)者とみていたのであろう。

有島のインガソル理解が正しかったか否かは充分に知ることはできないが、少くともキリスト教が形式的な制度によっていかに人間疏外をなしているかを指摘し攻撃している者として、そしてその主張が、有島の間追究を能動的に支え、一つの推進力として働く力を持っているものであるという理解をしていたということはできよう。友人末光績に米国からインガソル文集を送ったことが末光あての書簡に書かれている(一九〇五・十一・二十九)が、末光は當時を懐想して、

〔其後〕君はインガソルの文集を送って僕を戦慄せしめたことがある。よほど勇氣を出して読んだが、心の空は刻々暗くなる。

当時の僕には耐へきれない怖ろしい誘惑であった。(中略)當時其程に僕は信仰途上の怯者であり、君は既に後へは引かず向ふへ突き抜けねば止まない勇進者であったのだ。〔「火の前に立ちて」―泉終刊有島武郎記念号―〕

と言っているが、この時がまさに有島の魂の転機であったことをよく物語っていると思われるのである。

かくして、教会は、有島にとって、彼の理想とするところの「人間のよう」に「人間の」な生き方を許容しえないばかりか、かえって疏外するところの場として面前に立ちはだかる存在となつて、ついに、その存在の意義が否定されるに至つたのである。有島の新しい生は、新しい生の共同体でしか生存しえないものとして認識されたのである。

一方、教会の中に人間性を破壊する虚偽の影を見出したということは、その虚偽を、真理ではないものであるにも拘らず、自らの生の根源として遵守していかなければならないとする自己の中にある虚偽性の発見をも意味している。ここに有島の教会退会の内的必然性があるのである。

有島は時代のキリスト教会について、つぎのように述べている。

今の基督教会は基督の名に於て成り立ってあるものですが、今後に基督がこの世に生まれ出て来たとし、現存の基督教会の人は、彼の許に來て、この世界中に多数の信徒を有するわが基督教会は、実にあなたの言行に基いて建てられましたものであります故、その教会の元首となつて下さいと頼んだと想像して見たら如何でせう。若し自由に自由な想像が許されるなら、基督は必ずその教会に属することなく、或は教会に対して非難の声を挙げるやうなことが起るのではないかと思ふのです。〔「ホットマンに就

有島のキリストは、彼の延長としてのみその存在を許されたものであった。だから、その自己拡大にとらえられたキリスト自らが属することを否み、非難する教会を、有島もまた、その存在の意義を否定し、退会を宣言するのも当然のことと言わねばならないのである。「人間イエス」への憧憬が、有島の教会退会を内面的に支えていたと言うこともその意味において可能であるといえよう。そして退会後の生活が入信以来もち続けていた「人間イエス」への憧憬を思想化し、生活化するための具体的な場であったということもまた可能なのではあるまいか。

六

さて、このように考えてきた場合、一つの新しい問題が生じてくる。それは有島の神はいったい何であったのかという問題である。キリスト者たらんとして生活をしているときの神が聖書に書かれている神の姿をとることは当然のことである。しかし、神の子キリストによって啓示せられた神以外にキリスト教の神は存在しえないとするならば、これまでに考察してきたところから明らかなように、本質において、神の子としての存在を否定された人間キリストをその信仰の内容としていた有島であったということは、たとえ神という名が用いられていたとしてもそれは元来キリスト教の神とは無縁のものであったといわねばなるまい。渡米以前の神認識のしかたを自然神学的汎神論と、一応定義はしたものの、これとて一つの既成の概念であり、もっと異ったかたちで、有島独自の神認識がなされていたのではあるまいかという疑問が提出されてくるのである。

たとえば有島は足助素一に、
兄の上に、神の、運命の、或は何者かの祝福裕なれ。〔一九一五・八・二九〕
と書き送っているが、この言葉の中に「有島の神」を探る一つの手がかりを見い出すことができるように思われるのである。

若し理外の理を信するならば、一判字家の所説を信するより、基督が神の独子である事其外基督の伝説の総てを信する方が遙かに善い。〔一九一八・七・十四付書簡〕

同じ足助にこう書き送っている有島は、まさに神性を付与された神話的キリストを否定し、「人間イエス」への憧憬を生活化せんとする意欲に満たされていたはずである。それにも拘らず、有島には神があったと思わざるを得ないような言葉が——思想がみられるのは、いったいどうしたことなのであろうか。さらに稿を改めて考察してみたいと思う。

註一 Ranan, Joseph Earnest 〔一八二三—一八九二〕フランスの宗教史家、セム学者。初め教職を志し、パリの聖シユルピス神学校に学んだが、四五年中退した。『Histoire de l'Orgine du Christianisme』七巻を一八六三—一八三三年に完成し、その中の「Ta Vie Jesus」(イエス伝、六三)は、イエスを人間的、文化的に見、最も名高く、論議を起した。〔比屋根安定編「新・キリスト教辞典」〕

註二 有島武郎研究―自然観にみられるキリスト教の受容と定着の考察―

註三 熱情的性格の婦人。ガリラヤ湖畔のマグダラの出身で「七つの悪霊」を追い出してもらってから、イエスに従うようになったといわれる。(ルカ8・2)その財産をもってイエスに仕えた婦人たちの一人である。(ルカ8・3)十字架のイエスを八遠くの方から見ていた√(マタイ27・56)ばかりでなく、その埋葬に立ち会って、入納められた場所を見とどけた√(マルコ15・47)。その後三日目、週の初めの日にイエスの死体に塗る香料を携えて墓に行き、そこで復活の主を拝した。(マルコ16・1、ヨハネ20・11―18)〔『聖書事典』日本基督教団出版部〕

註四 ヨハネによる福音書第七章五三節から八章十一節に描かれているイエスと、姦淫した女との物語は、元来この福音書の古写本には記載されていないものであって、この女の素性は勿論判明していない。有島は聖書のこの部分が「新約聖書中深く愛読し」たところであると述べている。(一九〇三・三・二・八、日記)

註五 峯末亡人の直話(一九六三年九月一日)によると、その時の条件は、

- (一) 暫時であること
- (二) 聖餐式は御飯とぶた汁で年一回であること〔伝統的な形

式としては、パンとぶどう酒によるものである〕
(三) 無宗派であること〔竹崎牧師は超教派の合同教会設立のために働いた〕
(四) 献金は廃止すること
(五) 家庭訪問伝道は行わないこと
というものであったという。

註六 ロバート・G・インガソル(一八三三―一九九)アメリカの思想家。弁護士。New York 州出身。「偉大なる不可知論者」として知られ、合理主義の立場からキリスト教を批判し、第十九世紀後半のアメリカ思想界に大きな影響を与えた。〔『英米文学辞典』研究社版〕とくに詩人ホイットマンとの関係は深く、詩人はその晩年にインガソルの讚美者〔admirer〕であったこと。〕

In the last years of his〔Whitman〕 life he was a great admirer of Robert Ingersoll…… of Thomas Huxley, the biologist.〔Roger Asselnean “The Evolution of Walt Whitman”〕
主著で“The Gods”“Some Mistakes of Moses”“why I am an Agnostic”“Superstition”などがあり、全集十二巻も出版されている。日本においては、『『耶穌教排撃論』〔津田純一・須田辰次郎共訳、博聞社、明治十五年刊〕と、『『耶穌教弁妄』〔武侯欽明訳、弘道書院、明治十九年刊〕の二冊が訳出され現在国立国会図書館に保存されている。